



卒業 新たな一歩 中

安城市の県立安城特別支援学校の高等部で心掛けるのは、「一人ずつ、オーダーメイドでコーディネートしていく進路指導なんです」と西堀哲夫教頭は説明する。今春の卒業生六十四人の進路で、最も多いのは生活介護事業所への三十二人。そのほか、就労継続支援A型、B型事業所や就労移行支援事業所などに十六人が進んだ。企業へ就職したのは十五人だ。

就職を目指す生徒たちは高校一年時から、教員との面談を繰り返す。教員は本人の希望や適性を探り、保護者の思いを聞く。生徒の希望が企業側の要望と合致すれば、現場での実習が始まる。実習先を選ぶ段階か

職場探し 相性見極め



海外からの視察が来ることも、昨年9月、実習の様子を見学するインドネシア企業の障害者雇用の関係者ら
①見学に訪れたインドネシアの企業関係者に、授業の様子などを説明する教員(奥)ら
②いずれも安城市桜井町の安城特別支援学校で

「この生徒は、この企業の仕事」と、狙いを定めて進めるのだ。「産業現場等における実習」は二年生の秋に一、二週間、三年生の春に二週間、就職を希望する企業で取り組む。実習で、生徒と企業が互いに希望に合っているかを確認し合い、ようやく「就職試験」にこぎつける。進路担当の教員らにとっても、この企業探しとその後

企業の採用担当者には「周りを気にしすぎる面があるが、その分、いろんなことによく気が付く」など、生徒の個性を丁寧に伝える。学校の様子も知ってほしいと、校内見学も積極的に受ける。お互いの理解を早いうちから深めることが、就職後の定着率アップにもつながるからだ。「『やっぱり合わなかった』と退職してしまうことがないように、最善の職場を探してやりたい」との思いは強い。そのため、日々の授業でも「分からない時や困った時に、質問や相談ができるか」「間違えたときに素直に言えるか」など、実習先や就職した際に必ず必要となる力を養わせようと工夫を凝らす。新たに実習の受け入れを検討する事業所による面談会もあり、面接に向けて練習も重ねる。コミュニケーションが苦手な生徒たちが「少しでも自分の思いを相手に伝え、分かってもらえるように」と指導に力が入る。